論　　説

樋口一葉の後期について
－音読による授業構成の試み－

渡辺　和靖

要旨

教員養成大学において哲学・倫理学にかんする共通科目（あるいは専門科目）の講義をどのように構成するのが適正であるか。筆者がここ数年実践している、日本の近現代文学のテキストを提示しそれを音読させることによって、作品の内容のみならず、言葉の響きやリズムを通して、時代の雰囲気を体得させる試みを、樋口一葉を扱った具体例を掲示することによって論述した。

キーワード：授業構成、音読、樋口一葉

愛知教育大学に奉職して30年、小中学校の教員を目指す学生に対して、共通科目あるいは専門科目における哲学・倫理学の講義をどのように構成すべきかについて、長い間試行錯誤を繰り返してきた。はじめのころは西田幾多郎の『善の研究』や三木清の『哲学入門』などを読んだりもしたが、必ずしも学生の興味を惹きつけることはできなかった。また、身近なものとして日本の探偵小説を素材にしてレポートを制作させたりもしたが、じゅうぶん成功したとは言えなかった。しかし、最近に至ってようやく一つの授業の型を発見したという確信に到達したので、それについて報告したい。

きっかけは、愛知県日進市で6年間にわたって、社会教育講座の講師を勤めたことであった。20代の主婦から80代のお年寄りまで、毎回30数名のきわめて熱心な受講生を前にして、明治の思想史、大正昭和の思想史、萩原朔太郎など、自分がこれまでに研究したテーマを取り上げてお話したが、受講生の熱烈な要望のなかで回を重ねるにつれて題材が尽きてしまった。そこで思い至ったのが、これまで私が指導して制作された卒業論文の数々であった。

指導した学生は1年に1人から12人までいろいろだが、平均5人として、30年でおよそ150篇の卒論が私の手許に残されていることになる。とくに、私が萩原朔太郎の研究に着手した20年前頃から、私の研究室はさながら国文学研究室のような観を呈し、日本近現代の文学作品を研究するもので溢れた。

これを利用しない手はないだろう。これらの卒論から特にすぐれたものを選んで、論旨を明瞭化し、原典に当たって資料を増補するなどの補正を施して、講座のための準備を調えた。それは、やがて、大学の講義においても威力を発揮するようになった。

講義に際しては、原典の音読を重視した。とりわけ明治の文学は、音読されることを前提として執筆されている。当時の新聞・雑誌は、ほとんどが総ルビであった。ルビは単に難しい漢字の読みを示すというに止まらず、作者が読者に読みを指示するという役割を果たしていた。読む側もまた、それらを音読したのである。

原典の重要な部分をピックアップした資料を配布し、それを音読させることによって、内容を理解させるとともに、日本語の響きやリズムを味わせ、時代の雰囲気をつかませるとともに、時代の課題を理解させることができると考えたのである。

小中学校の教員を目指す学生にとって、田辺元や三木清の難解な哲学書を読み哲学的思考を身につけることは無論、重要な営みであるということができる。しかし、哲学的思考を身につけることと、哲学的な思考を児童・生徒に伝達することとは自ずから別の営みであり、それは難解な哲学書を読むことだけでは獲得されないと思われる。

とりわけ、明治を過ぎる頃から、日本の哲学はアカデミズムの垣根に籠もり、時代の流れとの関連を喪失していったように見える。橋川文三は、日本の近代思想史は文学史によって担われたという意味のことを語っている。つまり、文学は、とりわけ日本の近現代においては、時代の思想的課題を担う最尖端のメディアであったということができるのである。その意味で、哲学・倫理学の授業に文学を取り上げることにはじゅうぶんな意味がある。むしろそれは、難解な哲学書を読む以上に、学生に日本の近代思想に対する興味を喚起することになるのではないだろうか。

学生の卒業論文を基礎にして準備された資料が毎年増えていき、樋口一葉だけでも、初期、中期、後期ⅠⅡの4篇、そのほか川端康成『伊豆の踊子』、鈴木三重吉『千鳥』『桑の実』、有島武郎『迷路』、山本有三『生きとし生けるもの』など名作を扱ったもの、鴎外、漱石、藤村、芥川、賢治、中島敦、梶井基次郎、新美南吉、西条八十、坂口安吾、遠藤周作、立原道造、鮎川信夫などの作品を論じたもの、さらに隆慶一郎、司馬遼太郎など大衆作家を論じたものも含めて、今では50篇に届いている。今後さらに増えていくはずである。

これらについては、近日CDロム4枚組にて発売という予定はないが、参考のために以下に「明治の女の闘い――樋口一葉の後期Ⅰ」を一つの例として示した。二つの作品を一度にあつかうのは、作品を制作順に読むことで思想形成の流れの中に位置づけるという思想史の方法に基づいている。とりわけ、ここでは「にごりえ」という難解な作品を「たけくらべ」の流れの中で読むことで、そのモチーフを無理なく掴むことができるという点を指摘しておきたい。

授業時間としては2時間を想定しているが、場合によっては3時間をかけてもよいだろう。学生に音読させる部分をラインで囲んで示した。人数が多い場合は、何人かに分けて読ませてもいいだろう。最後にかならずひとりひとりに感想あるいは意見などを発表させ、理解を深めることが必要である。

明治の文章は現代の学生にとっては少し難しいので、樋口一葉の場合は、教師が一節を音読し、つづいて学生に繰り返させるという方法を採るのも効果的かとも思われる。また、ルビの数を増やすなどの工夫も音読には有効であろう。授業の対象となる学生の数は、10名から20名ほどが最適であり、50名が限度であろう。人数が多い場合は、細かく分けて音読させるのも一つの方法である。一度だけ100名を超えるクラスで試みたことがあるが、ほとんど効果的なものとはならなかったと記憶する。

〈講義例〉

「明治の女の闘い――樋口一葉の後期」

第1章「たけくらべ」――大人に成るは嫌な事

Ⅰ　囚われた人生

樋口一葉は明治5（1872）年旧暦3月25日（新暦5月2日）、東京府内幸町にある官舎で生まれた。戸籍名なつ。父は東京府の官吏であった。

母親の意見で進学を断念させられたが、勉学への強い志向を汲んだ父は、13歳になった一葉に短歌を学ばせた。

中島歌子の「萩の舎」で名門の夫人、令嬢たちと席を共にして源氏物語や短歌を学んでいた一葉に不幸が訪れる。明治20年に長兄泉太郎が、さらに22

年には父が死ぬ。やがてそれは経済的な不幸として、一家を貧苦のどん底に追いやった。家長として一葉は生活を支えることなる。

この頃、同門の先輩田辺花圃（のち三宅花圃）は小説『藪の鶯』を出版し、原稿料30余円を得た。これに刺激されて一葉は小説家になろうと決意する。

一葉の作家としての活躍は三つの時期に区別される。とくに後期は「奇蹟の一四箇月」と呼ばれ名作を次々に発表した。「たけくらべ」は『文学界』明治28年1月号から連載が始まり、2月、3月、8月、11月、12月と断続的に連載され、明治29年1月号で完結している。世評が高く、さらに『文芸倶楽部』明治29年4月号に一挙掲載された。一葉は、明治29年（1896）11月23日に死去している。享年24歳である。

冒頭、少年少女たちが生活する環境が描写される。

> 廻れば大門の見かへり柳いと長けれど、おはぐろ溝（どぶ）に灯火のうつる三階の騒ぎも手に取る如く、明暮れなしの車の往来（ゆき）にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は仏くさけれど、さりとは陽気の町と住みたる人の申き、

「大門」「見かへり柳」「おはぐろ溝（どぶ）」はいずれも吉原の風景である。

主人公の信如は、龍華寺の長男として、はやくから僧侶となるべき身であった。

> 多くの中に龍華寺の信如とて、千筋となづる黒髪も今いく歳のさかりにか、やがては墨染にかへぬべき袖の色、発心は腹からか、坊は親ゆづりの勉強ものあり、性来をとなしき（中略）今は校内一の人とて仮にも侮りての処業はなかりき、歳は十五、並背にていが栗の頭髪（つむり）も、おもひなしか俗とは変りて、藤本信如（のぶゆき）と訓にてすませど、何処やら釈といふたげの素振なり。

もう一人の主人公正太郎は、両親が既になく、かつて大きかった質屋も落ちぶれて、今は祖母と二人ケチな金貸しで日銭を稼ぐ身の上であった。対立する横町の長吉が正太郎について語る。

> 表町には田中やの正太郎とて歳は我れに三つ劣れど、家に金あり、身に愛敬あれば人も憎くまぬ当の敵あり、（中略）力を言はゞ我が方がつよけれど、田中屋が柔和ぶりにごまかされて、一つは学問が出来おるを恐れ、我が横町組の太郎吉、三五郎など、内々は彼方（あなた）がたに成たるも口惜し、

そしてヒロイン美登利は可憐な少女である。

> 解かば足にもとゞくべき毛髪（かみ）を、根あがりに堅くつめて前髪大きく鬣をもたげの、（中略）色白に鼻筋とほりて、口もとは小さからねど締りたれば醜くからず、一つ一つに取立てゝは美人の鑑に遠けれど、物いふ声の細く清しき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々したるは快き物なり、

古典的な美少女ではなく、動きのうちに美しさが匂う、新しいタイプの女性として描かれていることが注意される。

しかし、その身の上は、すでに吉原の遊女となるべき運命にあったことが示唆される。

> 楼の主が大切がる様子（さま）も怪しきに、聞けば養女にもあらず、親戚にてはもとより無く、姉なる人が身売りの当時、鑑定（めきき）に来たりし楼の主が誘ひにまかせ、此地に活計（たつき）もとむとて親子三人が旅衣、たち出しは此訳、それより奥は何なれや、今は寮のあづかりをして母は遊女の仕立物、父は小格子の書記に成りぬ、

美登利は、自らの運命を何の疑いもなく受け入れている。吉原に入り遊女になることが親孝行だと信

じているのである。

> かゝる中にて朝夕を過ごせば、衣の白地の紅に染むこと無理ならず、(中略) 女郎といふ者さのみ卑しき勤めとも思はねば、過ぎし故郷を出立の当時ないて姉をば送りしこと夢のやうに思はれて、今日此頃の全盛に父母への孝養うらやましくお職を徹す姉が身の、憂いの愁いの数も知らねば、(中略) 廓ことばを町に言ふまで去りとは恥かしからず思へるも哀れなり、

「たけくらべ」の草稿には、この点がさらに明瞭に記述されている。

> ヱゝ年のゆかぬが無念な、姉さんに孝行を先へ取られた、我れとても心ハ誰れにおとるべき、(中略) 其時こそハ美登利が孝行のし時父さんは甘き物そへて酒のませ、母さん（に小遣の苦もさせじ）のほめ詞きゝたや、あゝ年が取たい孝行がしたい、(草稿)

「年が取たい孝行がしたい」と、美登利は素朴に遊女になることを心待ちにしている。

一方母親の方も美登利が吉原の遊女になることを当然のことと考えている。末尾近く、正太郎が美登利の家に遊びに行く場面である。

> 正太は大人らしくかしこまりて加減が悪るいのですかと真面目顔に問ふを、いゝゑ、と母親あやしき笑顔をして、少し経てば癒りませう、例も極りのやんちやさん、嘸お友達とも喧嘩しませうな、ほんに遣り切れぬ嬢様ではある、とて見返るに、美登利はいつもの小座敷に蒲団抱巻持いでゝ、帯と上着をぬぎ捨しばかりうつ伏し臥して何とも言はず。／(中略) 人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむもあれども、母の親一人ほゝ笑みては今にお侠の本性は現れまする、これは中休みと子細ありげに言はれて知らぬ者には何の事とも思はれず、

「あやしき笑顔」「子細ありげに」という描写のうちに、美登利が遊女になるのを当然のように考えている母親の姿が示されている。

しかし、美登利は作品の最後で血を吐くように叫ぶ。

> 何時までも何時までも人形と紙雛様とを相手にして飯事ばかりして居たらば嘸かし嬉しき事ならんを、ゑゝ嫌やゝ、大人に成るは嫌やな事、何故此のやうに年をば重る、もう七月十月、一年も以前へ戻りたい

これは、決して少女の頃が懐かしいというノスタルジーではない。自らに与えられた運命への抵抗の姿勢を示すものである。このような運命への抵抗感は、美登利のみに見られるものではない。

正太郎もまた、田中屋の再興という祖母の夢を叶えたく思いながら、そうした自らの運命に対して抵抗感を懐いている。

> まだ今時分は宜いけれど、冬の月夜なにかに田町あたりを集めに廻ると土手まで来て幾度も泣いた事がある、何さむい位で泣きはしない、何故だか自分も知らぬが種々の事を考へるよ、あゝ一昨年から己れも日がけの集めに廻るさ、祖母さんは老年だから其うちにも夜るは危ないし、目が悪るいから印形を押たり何かに不自由だからね、(中略) 己れが最ふ少し大人になると質屋を出さして、昔しの通りでなくとも田中屋の看板をかけると楽しみにして居るよ、

祖母に対する愛情から、高利貸しの仕事を手伝っているが、正太郎は、それが自分にとってふさわしいものであるかどうかに疑問を抱いている。

信如は、自らが僧侶となることについて真剣に取り組んでいるが、これも自らに与えられた運命に対

する抵抗と考えることができる。

父親である住職は、ものにこだわらない豪放磊落な人物として描写されている。肉食妻帯が宗旨で許されているとはいえ、妻に簪屋までさせている。ウナギを肴に酒を飲むのが大好きで、ウナギを買うのは信如の役目であった。

> 夕暮の縁先に花むしろを敷せて、片肌ぬぎに団扇づかひしながら大盃に泡盛をなみ〳〵と注がせて、さかなは好物の蒲焼を表町のむさし屋へあらい処をとの誂へ、承りてゆく使ひ番は信如の役なるに、その嫌やなること骨にしみて、路を歩くにも上を見しことなく、筋向ふの筆やに子供づれの声を聞けば我が事を誹らるゝかと情なく、そしらぬ顔に鰻屋の門を過ぎては四辺に人目の隙をうかゞひ、立戻つて駈け入る時の心地、我身限つて腥きものは食べまじと思ひぬ。

つまり信如は、ただ世襲としてではなく、僧侶になる限りは真剣に仏教を修行しようと決意しているのである。

主人公の3人は、いずれも、まだ色濃く残る封建制度の雰囲気の中で、親の意志を受け入れることで自らの将来を選択しながら、それに微妙な違和感を感じているのである。

II　縁の赤い布

信如と美登利は、育英舎という同じ学校の同級生であった。春季の大運動会の折のことだった。

> 信如いかにしたるか平常の沈着に似ず、池のほとりの松が根につまづきて赤土道に手をつきたれば、羽織の袂も泥になりて見にくかりしを、居あはせたる美登利みかねて我が紅の絹はんけちを取出し、これにてお拭きなされと介抱をなしけるに、友達の中なる嫉妬や見つけて、藤本は坊主のくせに女と話しをして、嬉しさうに礼をいつたは可笑しいではないか、大方美登利さんは藤本の女房になるのであろう、お寺の女房なら大黒さまと云ふのだなどゝ取沙汰しける、（中略）夫れよりは美登利といふ名を聞くごとに恐ろしく、又あの事を言ひ出すかと胸の中もやくやして、何とも言はれぬ厭やな気持なり、

明治において確立された近代的なシステムの中で、2人は、互いにすべてを抛って結ばれる可能性を持っていたことが語られている。信如が美登利を避けるようになったのは、おそらく、その可能性に気付いたからである。

信如と美登利が顔を合わせる最後の場面がある。信如は傘をさして美登利の家の前を通りかかる。

> さつと吹く風大黒傘の上を抓みて、宙へ引あげるかと疑ふばかり烈しく吹けば、これは成らぬと力足を踏みこたゆる途端、左のみに思はざりし前鼻緒のずるゞと抜けて、傘よりも是れこそ一の大事に成りぬ。（中略）美登利は障子の中ながら硝子ごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母さん切れを遣つても宜う御座んすかと尋ねて、針箱の引出しから友仙ちりめんの切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍かしきやうに、馳せ出でゝ、縁先の洋傘さすより早く庭石の上を伝ふて急ぎ足に来たりぬ。

雨の中を下駄の鼻緒を切らして難渋している人がいるのを見て、赤い友禅の切れ端を持って外に走り出る美登利。振り返る信如。

> それと見るより美登利の顔は赤う成りて、何のやうの大事にでも出逢ひしやうに、胸の動悸の早く打つを、人の見るかと背後のみられて、恐るゝと門の傍へ寄れば、信如もふつと振返りて、此れも無言に脇を流るゝ冷汗、跣足に成りて逃げ出したき思ひなり。／（中略）物いはず格子のかげに小隠れて、さりとて立去るでも無しに、唯うぢゝと胸とゞろかすは、平常の美登

利の体にては無かりき。

うつむいたままの信如。

顧ねども其人と思ふにわな〳〵と顫へて顔の色も変るべく、後向きに成りて猶も鼻緒に心を尽すと見せながら、半は夢中に、此下駄いつまで懸りても履ける様には成らんともせざりき。（中略）此処に切れが御座んす、これでおすげなされと呼かくる事もせず、これも立尽して降雨袖に侘しきを厭ひもあへず小隠れて覗ひし

話しかけることもできず、雨の中にただ立ちつくす美登利。

さりとも知らぬ母の親はるかに声をかけて、火のしの火が熾りましたぞえ、この美登利さんは何を遊んで居る、雨の降るに表へ出ての悪戯は成りませぬ、又この間のやうに風引かうぞと呼立てられるに、はい今行ますと大きく言ひて、其声信如に聞えしを恥かしく、胸はわく〳〵と上気して、何うでも明けられぬ門の際に、さりとて見過ごし難き難気の体をさまざまの思案つくして、格子の間より手に持つ裂れを物いはず投出せば、見ぬやうに見て知らず顔を信如の作るに、ゑゝ例の通りの心根と遣る瀬なき思ひを眼に集めて、

母親が家の内から美登利をせかす。雨の中で、放り出された友禅が濡れて滲んでいく。

一ト足二タ足ゑゝ何ぞいの未練くさい、思はく恥かしと身をかへして、かた〳〵と飛石を伝ひゆくに、信如は今ぞ淋しう見かへれば、紅入り友仙の雨にぬれて紅葉の形のうるはしきが我が足ちかく散ぼひたる、そゞろに床しき思ひはあれども、手に取あぐる事をもせず空しく眺めて憂き思ひあり。

ここには、美登利の信如への思慕と同時に、信如の美登利への慕情が表現されている。この2人の思いを断ち切るのが母親の声であることは象徴的である。親と子の絆を切断することなしには、2人の可能性は閉ざされたままである。

そこへ通りかかるのが、初めて吉原に登楼し、朝帰りの長吉である。

心残りして振かへれば、信さん何うした鼻緒を切つたのか、其姿は何だえ、見ツともないなと不意に声を懸くるものゝあり。／驚いて見返るに暴れ長吉、今廓内よりの帰りと思しく、裕衣を重ねし唐桟の着物に柿色の三尺を例の通り腰の先にして黒八の襟のかゝつた新らしい半天、印の傘をさしかざし高足駄の爪皮も今朝よりぞとしるく、漆の色のきわ〳〵しうて立ちけり。

長吉は自らに与えられた運命に何の疑いも懐くことなく、大人へと成長していく。そういう存在の象徴である。吉原で登楼し朝帰りすることは、長吉にとって、まさしく大人になることである。うじうじとうずくまる信如を見下ろしながら、長吉は誇らしげでさえある。

しかし、ここで一葉は、格好悪い信如の側にいる。美登利の側にいる。正太郎の側にいる。与えられた運命に疑問を抱きつつ、悶々として生きていく人間の側にいる。美登利の姿があでやかであればあるほど、その美登利の運命は、残酷であり、それを強いる両親がいかに無自覚なかたちで美登利を悲劇へと追いやっているかが読者の胸を打つ。読者が美登利の未来に胸を突かれるそれだけ、一葉の時代や社会への告発が強く響いてくる。一葉は、ここで、はじめて、〈悲劇〉という小説のスタイルを確立するのである。

美登利はかの日を始めにして生れ替りしやうの従順しさ、（中略）表町は俄に淋しく成りて正太が

美音も聞く事稀に、唯夜な夜なの弓張提灯あれは日がけの集めとしるく、土手を行く影そぞろ寒げに折ふし供する三五郎の声のみ何時に変らず滑稽(おどけ)ては聞えぬ。／龍華寺が我が宗の修業の庭に立出る風説(うわさ)をも美登利は絶えて聞かざりき、

信如、正太郎、美登利の3人がそれぞれバラバラにその人生を歩んでいく姿が描かれる。

或る霜の朝水仙の造り花を格子門の際(きわ)よりさし入れ置きし者の有けり、誰れの処業(しわざ)と知る者なけれど、美登利は何故となくなつかしき思ひにて違い棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿を愛(め)でけるが、聞くとも無しに伝へ聞く其明けの日は信如が何がしの学林に袖の色をかへぬべき当日成りしとぞ。

水仙の造花を美登利の家の門に差し入れたのは疑いもなく信如である。その意味についてはいろいろ議論されているが、それが信如の美登利への思慕を示すものであることは間違いなかろう。

以上の展開において、作品の執筆された明治20年代が、封建的な意識と近代化とが相せめぎ合う時代であり、子供を自分の所有物のように扱う親たちと、それに抵抗感を自覚する少年少女たちの葛藤をとおして、樋口一葉が時代に対する厳しい告発を表現したことが読みとれると思われる。

第2章 「にごりえ」——お前は出世を望むな

1 娼婦に誠あり

「にごりえ」は、『文芸倶楽部』明治28年9月号に掲載された。主人公のお力は、銘酒屋菊の井の看板酌婦である。冒頭でお力は次のように描写される。

中肉の背格好すらりつとして洗ひ髪の大嶋田に新わらのさわやかさ、頸(えり)もと計の白粉も栄えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸をくつろげて、烟草すぱ〜と長煙管に立膝の不沙法さも咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の浴衣に引かけ帯は黒繻子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の処に見えて言はずと知れし此あたりの姉さま風

お力は、対比的に描かれる年増で厚化粧のお高と比べて、器量のいい魅力的な女性として描かれている。しかし、これは、あくまでも外面的な描写の場面であり、そこに特に意味を読み込む必要はない。お力は、ありきたりの酌婦の一人として、道行く男に声をかける。

さる雨の日のつれ〜に表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉らえずんば此降りに客の足とまるまじとお力はかけ出して袂(たもと)にすがり、何(ど)うでも遣(や)りませぬと駄々をこねれば、容貌(きりょう)よき身の一徳、例になき子細らしきお客を呼入れて二階の六畳に三味線なしのしめやかなる物語、

客と酌婦とのありきたりの会話。

年を問はれて名を問はれて其次は親もとの調べ、士族かといへば夫れは言はれませぬといふ、平民かと問へば何うござんしようかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞くに、まあ左様(さう)おもふて居て下され、お華族の姫様が手づからのお酌、かたじけなく御受けなされとて波々とつぐ

客と酌婦のありきたりの会話。

お前のやうな別品さむではあり、一足とびに玉の輿にも乗れさうなもの、夫れとも其やうな奥様あつかひ虫が好かで矢張り伝法肌の三尺帯が気に入るかなと問へば、どうで其処(そこ)らが落でござりましよ、此方(こちら)で思ふやうなは先様が嫌なり、来いといつて下さるお人の気に入るもなし、浮気のやうに思召しましようが其日送りでござんすといふ、

客と酌婦のありきたりの会話。

あゝ貴君もいたり詮索なさります、馴染はざら一面、手紙のやりとりは反古の取かへツこ、書けと仰しやれば起証でも誓紙でもお好み次第さし上ませう、女夫やくそくなどと言つても此方で破るよりは先方様の性根なし、（中略）相手はいくらもあれども一生を頼む人が無いのでござんすとて寄る辺なげなる風情、

馴染みとなった客、結城朝之助は週に2、3回通ってくるようになる。

客は結城朝之助とて、自ら道楽ものとは名のれども実体なる処折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈強なる年頃なればにや是れを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何処となく懐かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの様子

「無職業妻子なし」という部分には、朝之助とお力が結ばれる可能性がはっきりと示されている。

結城は真面目になりてお力酒だけは少しひかへろとの厳命、あゝ貴君のやうにもないお力が無理にも商買して居られるは此力と思し召さぬか、私に酒気が離れたら坐敷は三昧堂のやうに成りませう、ちつと察して下されといふに成程〳〵とて結城は二言といはざりき。

朝之助は、お力の酒の飲み過ぎを注意するが、お力がこれがなければ生きていけないと言うと、もう二度と言わない。ここには、朝之助はお力の心を察することのできる人間であることが示されている。朝之助は、世間的な評価に左右されずに人間を見ることのできる人間なのである。

朝之助は寝ころんで愉快らしく話しを仕かけるを、お力はうるさゝうに生返事をして何やら考へて居る様子、どうかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、何頭痛も何もしませぬけれど頻に持病が起つたのですといふ、お前の持病は癇癪か、いゝゑ、血の道か、いゝゑ、夫では何だと聞かれて、何うも言ふ事は出来ませぬ、でも他の人ではなし僕ではないか何んな事でも言ふて宜さそうなもの、まあ何の病気だといふに、病気ではござんせぬ、唯こんな風になつて此様な事を思ふのですといふ、困つた人だな種々秘密があると見える、

しだいに朝之助に心を開いていくお力ではあるが、なかなか心の内を明かそうとはしない。というよりも、「およしなさいまし、お聞きになつても詰まらぬ事でござんす」と言うように、他人に語っても、理解されないだろうと言う思いがあったのである。

外面的に描かれてきた酌婦たちの内面が明らかになる場面がある。

聞いておくれ染物やの辰さんが事を、（中略）宜い加減に家でも拵へる仕覚をしてお呉れと逢ふ度に異見をするが、其時限りおい〳〵と空返事して根つから気にも止めては呉れぬ（中略）私はこれでも彼の人の半纏をば洗濯して、股引のほころびでも縫つて見たいと思つて居るに、彼んな浮いた心では何時引取つて呉れるだらう、

と、一人は、酌婦であるが故に、結婚したいと思う相手に本気になってもらえないことを嘆き、もう一人は、

私が息子の与太郎は今日の休みに御主人から暇が出て何処へ行つて何んな事して遊ばうとも定めし人が羨しかろ、父さんは呑ぬけ、いまだに宿とても定まるまじく、母は此様な身になつて恥かしい紅白粉、よし居処が分つたとて彼の子

は逢ひに来ても呉れまじ、(中略) 常は何とも思はぬ島田が今日斗(ばかり)は恥かしいと 夕ぐれの鏡の前に涕ぐむもあるべし、

「にごりえ」の発表当時、内田魯庵は「一葉女史の『にごり江』」(『国民之友』明治28年10月) で、

『にごり江』の作者は此買淫婦に対して無量の同情を運ぶを惜まざりし一事にて既に〳〵と少からざる感歎を受くるに足るべし。女性の身としては最も醜陋猥褻なる外皮に包まるゝ買淫婦なれば厭悪するこそ当然なるに、却て多涙なる同情を灑ぎしは縦令ひ全篇が多くの欠点を有つも猶ほ十分なる讃賞を払ふの価値あるべしと信ず。

と記している。一葉は、当時、丸山福山町に住しており、その身近に娼婦たちを観察する機会を持った。残された日記の断片に以下のような一節がある。

かれも人也馬車にて大路を豪奢をきそふ人あり　これも人也夕くれの門にゆきゝを招きて情をうるの身あり　かれを貴也といふしるへからす　これを賤しといふしるへからす　天地は私なし　万物おの〳〵と所に随ひておひ立ぬへきを何物そはかなき階級を作りて貴賤といふ　娼婦に誠あり　貴公子にしてこれをたはからむハ罪ならすや　良家の夫人にしてつまを偽る人少からぬにこれをはうき世のならひとゆるして一人娼婦斗せめをうくるは何ゆゑのあやまりならん　あはれこれをも甘じてうくれはうき世に賤しきものゝそしりをうくるもむへなるかな

II　お力の告白

以上のように、酌婦たちの内面が描かれた後、ようやくお力の内面が語られることになる。それは、さきの娼婦たちの悲しみとは次元の異なるものであった。

ある夜、お力は宴会の席から突然一人抜けだし、ふらふらと外へ歩いていく。

お力は一散に家を出て、行かれる物なら此まゝ唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ嫌だ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の声も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない処へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時(いつ)まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ〳〵と道端(みちばた)の木立へ夢中に寄かゝつて暫時(しばらく)そこに立どまれば、(中略) 悲しいと言へば商買(しょうばい)がらを嫌ふかと一ト口に言はれて仕舞(しまう)、ゑゝ何(ど)うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう、

と思い返して、お力は、再び菊の井への道を辿っていく。

行かよふ人の顔小さく〳〵擦れ違ふ人の顔さへも遙とほくに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがり居る如く、がや〳〵といふ声は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響きに聞なされて、人の声は、人の声、我が考へは考へと別々に成りて、更に何事にも気のまぎれる物なく、人立(ひとだち)おびたゞしき夫婦(めおと)あらそひの軒先などを過ぐるとも、唯我れのみは広野(ひろの)の原の冬枯れを行くやうに、心に止まる物もなく、気にかゝる景色にも覚えぬは、我れながら酷(ひど)く逆上(のぼせ)て人心のないのにと覚束なく、気が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力何処へ行くとて肩を打つ人あり。

お力の肩をたたいたのは、朝之助であった。二人には今夜会う約束があったのをお力は思い出す。

左のみに心も留まらざりし結城の風采の今宵は何となく尋常ならず思はれて、肩幅のありて背のいかにも高き処より、落ついて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄くて人を射るやうなるも威厳の備はれるかと嬉しく、濃き髪の毛を短かく刈あげて頸足のくつきりとせしなど今更のやうに眺られ、何をうつとりして居ると問はれて、貴君のお顔を見て居ますのさと言へば、此奴めがと睨みつけられて、おゝ怕いお方と笑つて居るに、串談はのけ、今夜は様子が唯でない聞たら怒るか知らぬが何か事件があつたかととふ、

約束を違えずにやってきた朝之助の心根が嬉しくて、お力は、それまで躊躇していた、自分の過去について語ることを決意する。この人ならば自分のことをわかってくれるだろうと言う期待もあった。

親父は職人、祖父は四角な字をば読んだ人でござんす、つまりは私のやうな気違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて断食して死んださうに御座んす、（中略）私の父といふは三つの歳に縁から落て片足あやしき風になりたれば人中に立ちまじるも嫌やとて居職に飾の金物をこしらへましたれど気位たかくて人愛のなければ贔屓にしてくれる人もなく、

さらに少女時代の貧しい暮らしぶりも語られる。なけなしの金で買った米を溝にこぼして「立てしばらく泣いて居たれど何うしたと問ふて呉れる人もなく、聞いたからとて買てやらうと言ふ人は猶更なし。」「あの時近処に川なり池なりあらうなら私は定し身を投げて仕舞ひましたろ」とお力は語る。「話しは誠の百分一、私は其頃から気が狂つたのでござんす」。お力の言葉には、己の内面を充分伝えることのできない悲しさが込められている。

いひさしてお力は溢れ出る涙の止め難ければ紅ひの手巾かほに押当て其端を喰ひしめつゝ物いはぬ事小半時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄りくる蚊のうなり声のみ高く聞えぬ。（中略）顔をあげし時は頬に涙の痕はみゆれども淋しげの笑みをさへ寄せて、私は其様な貧乏人の娘、気違ひは親ゆづりで折ふし起るのでござります、

人前では決して泣かなかったお力が朝之助の前で泣いている。「私は其様な貧乏人の娘、気違いは親ゆづりで折ふし起こるのでござります」お力の半生は、要約すればこのような平凡なものであった。それは「種々秘密があると見える」という朝之助にとっても拍子抜けするようなものであったろう。

しかし、それは、お力の、自分の思ったとおりにこの世を生きたいという、精一杯の表現であったのである。祖父も父も、他人に理解されないまま、悲惨な一生を終えた。自分の思い通りに生きたいという平凡な願いを実現することができないことへの、それはささやかな否定の意志であった。

これに対する朝之助の反応。

お前は出世を望むなと突然に朝之助に言はれて、ゑツと驚きし様子に見えしが、私等が身にて望んだ処が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬといふ、嘘をいふは人に依る始めから何も見知つて居るに隠すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれ〜とあるに、あれ其やうなけしかけ詞はよして下され、何うで此様な身でござんするにと打しほれて又もの言はず。

この部分については、多くの議論がなされている。まず、「お前は出世を望むな」という朝之助の言葉について、「な」を禁止の「な」とする見解と、詠嘆の「な」とする見解が対立している。後の展開や未定稿からの流れを考えると、詠嘆の意味であると

するのが妥当であろう。つまり、「お前も出世を望むのだなあ」と朝之助は詠嘆したのである。

つぎに、朝之助の言葉に「ゑッと驚」くお力について、図星を指されたとする「図星説」と、見当違いな発言に驚いたとする「唐突説」とが対立している。

「図星説」では、朝之助に「胸中の秘密」をずばりと言い当てられてお力は驚いたとする。しかし、わずかに心を開いたかに見えるお力が「玉の輿」に言及しているのは、この時点で既にお力は一人の女性としてではなく、娼婦に戻って発言していることを示している。冒頭近く、朝之助との四方山話の中で「玉の輿」に言及されていたことに注意されたい。

お力は、帰ろうとする朝之助を引きとどめる。定稿はこのまま最後のお力の死の場面へと移るのだが、未定稿には、お力と朝之助の翌朝の別れが書き添えられているものが残されている。

> 何とは知らず心細く、又も一つ罪の数をそへぬ、あゝ身ながらも夕べの心のほどが分らぬ何で結城さんがゑらい人であろう、かしこい人であろう、ついひととほりの男一人、（中略）つまらぬくだらぬ馬鹿〳〵しい、何といふ私の心か、これが夢であれば善いがと返らぬ事を数へて（未定稿）

これは、先のお力がふらふらと外に出て朝之助に肩を叩かれた場面の「左のみに心に留まらざりし結城の風采の今宵は何となく尋常ならず思はれて」という部分と対応している。

朝之助は、お力を理解できる可能性を持った人物として登場したが、結局はお力を理解することができなかったのである。ここに、お力の絶望の深さがある。朝之助にさえも理解されなかったお力の悲劇が浮彫にされる。

お力の死は、人々の噂話として語られる。

> 彼の子もとんだ運のわるい詰らぬ奴に見込れて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくだと言ひまする、あの日の夕暮、お寺の山で二人立ばなしをして居たといふ確かな証人もござります、女も逆上て居た男の事なれば義理にせまつて遣つたので御座ろといふもあり、何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ湯屋の帰りに男に逢ふたれば、流石に振はなして逃る事もならず、一処に歩いて話しはしても居たらうなれど、切られたは後袈裟、頬先のかすり疵、頭筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる処を遣られたに相違ない（中略）諸説みだれて取り止めたる事なけれど、恨は長し人魂か何かしらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き処より、折ふし飛べるを見し者ありと伝へぬ。

未定稿によれば、お力が道雄（朝之助の前身）と「夏の始より馴染て三月の間むつましく」暮らすというものもあり、また、「聞くだにも恐ろしき最期のさま、我れと覚悟の自殺にはあるまじ、のどもと深くさし貫かれて死したる、其傷に落ちる得物もな」いと、お力の死が自殺ではなく他殺であることが明確に語られているものもある。

結末については、一葉も試行錯誤を繰り返している。初めは、お力が道雄の「囲はれ者」になり菊の井を出るという設定が打ち出されている。また、「人は結城（道雄の姓）の奥様とてそねむものありしが」、お力はこれに満足できず「床の間のしのびなきかくしても絶えず」、「湯呑の大酒やう〳〵と」増えていったとある。

そうした様々な構想をすべて破棄していまあるような結末にしたのは、一葉が、死んでなお誰からも理解されることのないお力の姿をとおして自らの主張を表現しようとしたと考えられる。ここに一葉における悲劇の意味がある。

お力の心の秘密も曖昧でその死の理由も曖昧であるとして、「にごりえ」を失敗作とする評価もある。

しかし、「たけくらべ」から展開という視点で見るならば、「にごりえ」は、お力という一人の娼婦

をとおして、人は自分の思うままに自由に生きることができるという願いを表現したものであることが理解されるであろう。そしてお力の無惨な死をとおして、一葉は、そのような人間の普遍的な願いを不可能にしている明治という社会を告発しているのである。

また、一葉が女性であったという事実も見逃せない。右利きの人間には、この社会が〈右利きのために造られた〉社会であることが見えない。左利きの人間は、様々な場面で不便さに出会い、この社会が〈右利きのために造られた〉社会であることを実感する。同じように一葉は、男性の作り出した、男性がありのままのもの、当然そうあるべきものと考えている社会において、それを異化する女性の眼によってこうしたすぐれた認識に到達したのである。この点は、次の作品「十三夜」においてさらに深められることになる。

付記

本稿は1991年1月提出の古居朋子の卒論「樋口一葉「たけくらべ」の研究——樋口一葉思想の展開を通して」及び1996年1月提出の平岡靖子の卒論「樋口一葉後期思想研究——「にごりえ」「十三夜」を中心にして」に基づいているが、文責は本稿筆者にある。テキストは『樋口一葉集（明治文学全集第30巻）』（筑摩書房）に拠っている。引用文中、新字体のある漢字はそれに改めた。